

# けしの圃

小川未明

青空文庫



旅たびから旅たびへ渡わたつて歩あるく、父ちちと子この乞食こじきがありました。父親ちちおやは黙だまりがちに先さきに立たつて歩あるきます。後あとから十じゅうになつた小太郎こたろうはついていきましました。

彼かれらは、いろりの村むらを通とおりました。水車小屋すいしやごやがあつて、そこに、ギイコトン、ギイコトンといつて、米こめをついているところもありました。また、青葉あおばの間あいだから旗はたが見みえて、太鼓たいこの音おとなどが聞きこえて春祭はるまつりのある村むらもありました。またあるところでは、同おなじ街道かいどうを曲馬師きよくばしの一隊たいが、ぞろぞろと馬うまに荷物にもつをつけて、女おんなや男おとこがおもしろそうな話はなをしながらいくのにも出であいました。そうかと思おもうと、さびしい細路ほそみちを、二人ふたりは町まちの方ほうへ急いそいでいるこ

ともありました。いまにも、降ふつてきそうな、灰はい色いろに曇くもつた空そらをき気にしながら、父ちち親おやが大おまたに歩あゆむのを、小太郎こたろうは小ちいさな足あしで追おいかけたのです。けれど小太郎こたろうは、こんなときにでも、圃はたけの中なかに立たつている梅うめの木きの葉はの間あいだから、青あおい、青あおい梅うめがのぞいていみるのを見逃みのがしませんでした。そして、そんな景けし色きを見ると、なんというかなことなく、悲かなしくなつて、自じ分ぶんには、面影おもかげすら覚おぼえのないお母かあさんのことなどが思おもい出だされて涙なみだがで出るほどでありました。

「お父とうさん、私わたしのお母かあさんは？」と、小太郎こたろうは父ちちに聞ききますと、

「おまえには、母は親おやなんかないのだ。」と、父ちち親おやは答こたえました。

「そんなら、私わたしのお母かあさんは、死しんでしまつたの？」

「うるさいってことよ。ああ、そうだ。死んだんだよ。」と、父ち

親ちおやはどなりました。

子供こどもは、付き場つけばがなく、小さな胸むねをわななかせて黙だまってしまっ  
のでありました。

村むらや、町まちを歩きまわって、たくさんお金かねをもらって来たときは、

父ちちおや親ちちおやは機嫌きげんがようございましたけれど、もし、少なすくかつたとき

は、口くちさき先さきをとがらして、

「やい、この盲目めくらめ、これんばかり働はたらいてきてどうするんだ。こ

こらあたりへ捨すてていってしまうぞ。」とどなりました。そして、  
小太郎こたろうの差さし出だした手てから、お金かねをひったくるように奪うばい取とるの  
でありました。

こたろう 小太郎は、すぐ目でありました。自分にもあまり覚えのない時分に、ぶん どうして片方かたほうの目をつぶしてしまったのかわかりません。  
あるとき、こんなことがありました。それはなんでも北の方で、あお 青い海の見える町でありました。町といつても家数の少ない小さ さなざびしい町で、まち 魚問屋や、呉服屋や、荒物屋や、いろんなしょうてん 商店がありました。いちばん魚問屋が多くあつて、町ちぜんたい 全体が魚臭さかなくさい空気に包まれていました。その町の木賃宿と に泊まったときに、父親は、ちちおや 子供を、こども 知らぬ男と女の前に出だ て、なにかいっていました。

はなし その話は、よく小太郎にはわからなかつたけれど、知らぬ男と女おんなに、小太郎をくれてやるといふような話はなしらしかつたのです。小

太郎たろうは、なんとなく心こころ細ほそくなつて泣なきたくなりました。そして、はたしてそれはほんとうに父ちちがそう思おもっているのだらうかと振り向むいて父ちち親おやの顔かおをじつと見みつめました。ちようど、そのとき、知しらぬ女おんなが、

「だつて、この子こは入いれ目めじやないかね。いくらなんぼでも役やくにたたない。」といいました。つづいて、知しらぬ男おとこが、しやがれ声こゑでなにかいいました。

「さあ、あちらへいこたろうこう。」と、父ちち親おやは、急きゆうに小太郎こたろうの手てを取とりました。小太郎こたろうは、やはり自分じぶんは父ちち親おやとは離はなれることことがないのだと思おもうと、急きゆうに氣きがゆるんで一時じに熱あつい涙なみだがほおに伝つたわりました。

それから、その暗い宿を立つて、また松原の中の小路を歩いて、つぎの町の方へと二人はいきました。

小太郎は、歩きながらいろいろなことを空想しました。いつも父親ちちおやに氣に入らないことがあるたびにひどくいじめられるよりは、あの女の人のところへ、もらわれていたら、あの女の人は、自分じぶんをかわいがってくれなからうか。けれど、あのしやがれごえおとこひとひとの男の人は怖い。などと思ひました。また、小太郎は、女の人がいった言葉ことばを思ひ出だしました。

「いくら、なんぼでも……。」と、女の人はいつたが、なんぼとは、どういう意味いみのことだろうと考かんえました。小太郎には、女の人のいつたことが心こころにはつきりわからなかつたのであります。



「お父さん、さっきの女の人は、どこの人なの？」と、小太郎は  
 父親に聞きました。

「西国のものらしいが、俺は知らねえ。」と、父親は答えま  
 した。

その後、父親は小太郎の入れ目を取り出して捨ててしまいま  
 した。いままでかわいらしい、美しかった少年の顔は、急に  
 醜いものとなってしまいました。けれど、その方がかえって、見  
 る人々からかわいそうだといわれて、お金をたくさんもらえる  
 ことと父親は思ったのです。

ある日の暮れ方、二人は町に入りました。この町はいままで見  
 たほかのどの町よりも、なんとなく気持ちのいい町でありました。

ちようど幾台となしに、馬が荷車を引いて、ガラガラと町の  
 中を通つてあちらへいくのを見ました。

一軒の酒屋の前へきかかりますと、父親は小太郎に向かつて、

「おまえは向こうの角に待つていれ。」といいました。父親は

酒が好きで、よくこうして、待たされたことがありますので、小

太郎はうなずいて、町の角に立つて、馬の通るのをながめていま

した。そのうちに、長い馬の列はいつてしまいました。けれど、

まだ父親の出てくるようすが見えませんでした。小太郎は、父

親はどうしたのだろうと思つて、酒屋の入り口に立つて、うす

暗い内をのぞきました。しかしそこには、父親のいるけはいも

なければ、また人の話し声もしませんでした。

「お父さん、お父さん。」と、小太郎は、急に心細くなつて泣き声を出して、父を呼びました。けれど、なんの返答もありません。その内に番頭が顔を出して、

「だれも、家にはきていない。」といいました。小太郎は、父は、もう先にいつてしまったのかと思つて、後を追うために駆け出しました。

いくら駆けても、父の姿を見いだすことはできませんでした。小太郎は、父が、たしかに、あの町の角で待つていれといったことを思いうかべて、自分を独り置き残して、どこかへいつてしまふはずがないと考えました。そして、いまごろは、父があ町の角で、自分を捜してはいはしまいかと思うと、また酒屋の前までも

どつてきました。けれど、そこにも、ついに父の姿を見いだすことはできませんでした。

「これは、きつと自分を置いて、お父さんはどこか遠いところへいつてしまったのだ。」と、小太郎は思いました。

彼は、あてなく、いなくなつた父親をたずねて町の中を歩きまわりました。そのうちにだんだん日が暮れてきて、歩いている人の顔がぼんやりとしてわからなくなりしました。とうとう小太郎は、足が疲れ、腹がすいて、町はずれにさしかかったとき、倒れてしまいました。

小太郎は、ぼんやりとして、西の空に沈んでしまった入り日のあとが、わずかばかり赤くなっているのをながめていました。す

ると、ちようどこのとき、町まちはずれに流ながれている河かわがありました。その橋はしを渡わたつて、つえをつきながらきかかるとおばあさんがありました。おばあさんは腰こしが曲まがっていました。そして、黒くろい頭ずきん巾ぎんをかぶっていました。

おばあさんは、小太郎こたろうの倒たおれているそばを通とおりかかろうとしまして、そこに子供こどもの寝ねているのを見みてびつくりいたしました。

「かわいそうに。」といって、おばあさんは、どうしてこんなところこたろうに寝ねているのかと聞ききました。

小太郎こたろうは、お父とうさんがいなくなつたのをくわしく物もの語がたりました。おばあさんは、小太郎こたろうの話はなしを一部ぶ始終しじゆう聞きき終おわると、

「私わたしは、この町まちに昔むかしから住すんでいる占うらない者しやだ。やはり私わたしの見みた占うらな

いが当たつていた。この町を出て二、三丁向こうへいくと、大きな屋敷がある。そのまわりを石垣で取り巻いている。おまえは、ここにあるこの笛を吹いて、その石垣の石をかぞえながら、今夜の中に、その屋敷のまわりを一まわりすると、おまえのまだ知らない、ほんとうのお母さんにあうことができる。」と、黒い頭巾をかぶつたおばあさんはいいました。

小太郎は、ほんとうのお母さんに、今夜あわれるということを知ると、いままでの悲しいことも、また腹の減つたことも、疲れたこともすっかり忘れてしまいました。そして、勇気づいて、急に飛び上がりました。おばあさんの教えてくれた方に走つていこうとしますと、おばあさんは、小太郎を呼び止めました。

「この笛ふえを吹くふくことを忘れてはならん。さあ、この笛ふえを持つていつて、石垣いしがきの石いしを一つずつ数えながら五つ数えてはこの笛ふえを吹ふき、十数とおぞえてはこの笛ふえを吹くのだ。」といつて、たもとから四つか五つの子供こどもの吹くふく、おもちやの笛ふえを取り出して、小太郎こたろうに渡しわたしました。

小太郎こたろうは、よほどきてから、向こうむかから歩いてくる人ひとに、「このあたりの、石垣いしがきのある大きな屋敷おおやしきは、どこでしょうかと、聞ききました。

「ああ、あの女おんなのきちがいおほのいる大きな屋敷やしきならもうじきですよ。」と、その人ひとはいいました。

小太郎こたろうは、その屋敷やしきには、きちがいおほのいるのだらうかとびつく

りしました。けれど、なんにしてもお母さんかあにあえるといううれしきで、歩いてあるきますと、なるほど、大きな屋敷やしきがありました。

屋敷やしきは、石垣いしがきで取り巻まいていて、その内側うちがわには、こんもりとした樹きがしげっていました。夜よが更ふけるにつれて、あたりはひっそりつそりとしました。月つきが上があって、青白あおしろく、野原のはらも路みちも彩いろどったのであります。小太郎こたろうはおばあさんあからもらった笛ふえを吹ふきながら、石垣いしがきの石いしを一つかずつ数かぞえて屋敷やしきをまわりました。

屋敷やしきの周囲まわりには広々ひろひろとした圃はたけがありました。そして、そこにはばらの花はなや、けしの花はなが、いまを盛さかりに咲さき乱みだれているのであります。なんともいえない、なつかしい香りかおが夜よるの空気くわいきにしみ渡わたっているのにつけて、小太郎こたろうはほんとうのお母さんかあを思おもい出だ



しました。そして、石を数えては、また笛を吹きながら屋敷の外  
とがわ ある側を歩いていました。

すると、向こうに、ぼんやりとして人影が動いたような気が  
こたろうしました。小太郎は、だれだろうと思ひました。なんでも、その  
ひとかげ ふえ ね人影は笛の音をいつしようにけんめいに聞いているようでありま  
こたろう ふえした。小太郎が笛を吹くと、その影は、動いてだんだんこつちに  
ちか近づいてくるようであります。

「三百八十六。」と、小太郎は石を数えて、また笛を吹き鳴らし  
ねいろました。その音色は、細く、悲しく、夜のあたりに響いたのです。  
ひび響いたかと思つと、はかなく、跡なく消えてゆきました。そのと  
ひとかげきだんだん人影は、こちらに近づきました。小太郎は、だれか、

自分じぶんをしかるのではなからうかと思おもいました。けれどその影かげは、  
 穏おだやかに動うごいて、そんなけはいもなく、なんとなく笛ふえの音ねを聞き  
 ては、こちらを遠とおくから、透すかして見みているようでありました。

だんだんその影かげが近ちかづきますと、それは女おんなの影かげであることがわ  
 かりました。美うつくしい女おんなが、髪かみを垂たれて、月つきの光ひかりを浴あびてたたずみ

ながら、ぼんやりとこちらを見みつめているようすでありました。

小太郎こたろうはもしやこの女おんなの人が、自分じぶんのほんとうのお母かあさんではな  
 からうかと思おもいました。そして、占うらいなしやしやのおばあさんが、今こん夜や、

おまえはほんとうのお母かあさんにあえるといつたことを思おもい出だして、  
 なんとなく小太郎こたろうの胸むねは躍おどつたのであります。

小太郎こたろうは、躍おどる胸むねを心こころで押おさえながら、また石いしを数かずえて、「三

百八十九。」といつて、笛を鳴らしました。

このとき、美しい女は、けしの咲いている圃の中を走つて小太郎に近づきました。

「小太郎じゃないか。」と、美しい女の人はいいました。

小太郎は、自分の名を呼ばれたので、びつくりしました。急には、返事ができなくて、黙つて、立つて女の姿を見守つていますと、

「おまえは、小太郎じゃないか。」と、なつかしい声で、二度呼びかけられたので、小太郎は、自分を忘れて、

「あなたは、お母さんですか。」といつて、女の人に飛びつきました。

「どうして、よくおまえはかえつてきておくれた。おまえがいなくなつた日から、私は、幾年の間毎晩、ここに立つておまえの帰るのを待つていたかしれない。ちようどおまえが四つの夏の日だつた。やはりこうして笛を吹いて、門の外に出たかと思うと、いつのまにかおまえの姿が見えなくなつた。おまえの帯にはお守り袋がついていて、それに名まえが書いてあるから、迷つたならだれか連れてきてくれるだろうと思つたが、それぎりついに歸つてこなかつた。きつと、人さらいに連れられていつてしまったものと思つたが、私は、その日から、病氣になつてしまつて、明け暮れおまえの身の上ばかり案じていた。おまえは子供の時分に片方の目がいけなくて入れ目をしていたが、ほんとうの小太郎

なら目が悪いはずだ。」といって、女の人は小太郎の顔を見ました。

小太郎は、いつか父親が怒って、悪い方の目から、入れ目を掘り出して、どこかへ捨ててしまつてから、まったくふさがつて醜みにくくなつていましたので、母親は見てびつくりしましたが、まさしく自分の子供であることがわかつて、家の中へつれて入りました。

家の中はりっぱでした。乞食をして歩いていた小太郎は、かつてこんなりっぱな家を見たことがありませんでした。小太郎は、はじめて姉や、妹にもあい、また、ほんとうのお父さんにもあうことができました。

その日ひから、小太郎こたろうは、なに不足ふそくのない生活せいかつを送りおくましたが、  
ときどき、乞食こじきの父親ちちおやを思い出だして、いまごろは、どうしてい  
るだろうと思おもうと、いい知れぬ悲かなしさを覚おぼえて涙なみだぐんだのであり  
ます。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「赤い鳥」

1920（大正9）年7月

※表題は底本では、「けしの圃《はたけ》」となっています。

※初出時の表題は「罌粟の圃」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。



# けしの圃

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>